

琉球祖語に遡る周辺的な音調型の一つ：副詞の特殊音調

ローレンス, ウェイン / LAWRENC, Wayne

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

30

(開始ページ / Start Page)

155

(終了ページ / End Page)

165

(発行年 / Year)

2006-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012540>

琉球祖語に遡る周辺の音調型の一つ — 副詞の特殊音調 —

ウェイン・ローレンス

0. はじめに

東京方言のアクセント体系はいわゆる $n+1$ (n 音節語の場合、音調の型の数は $n+1$)のものである。大阪方言の単語はアクセントのほかに、高起式と低起式の別があり、基本的には $2n-1$ の音調型があるが、短い単語(二・三拍語)の場合は $2n$ の音調型がある。鹿児島方言は句末音節が高い型と前句末音節が高い型とがあり、二音調型の方言である。これらの日本本土方言の音調型はそれぞれの方言の全品詞を網羅する。一方、琉球の諸方言では副詞はしばしば名詞や動詞と異なった音調で発音される。

本稿では、北琉球方言の与論方言と今帰仁方言、それに南琉球方言の鳩間方言の副詞に、他品詞にみられない音調があるのを例証した上で、それぞれの方言の副詞音調を比較することによって、その音調は琉球祖語に遡りうることを提案する。

琉球方言の副詞の先行研究に形態論・意味論の両側面から分析した野原(1992[1972-73])、町(1987, 1992)、外間(2004)があるが、本研究ではもっぱら音調と、長音化(副詞のばあい音調と深い係わり合いをもつ)を扱うことにする。

本稿では簡易音声表記を使用する($tu=[tu]$ 、 $ti=[ti]$ 、 $si=[ci]$ 、 $c\ddot{i}=[tsi]$ 、 $cja=[tca]$ 、 $aa=[a:]$)。アポストロフィー(′)は音節の境界をはっきりさせるために用いたもので、分節音ではない。高音調は上線で表し、中低音調は無表記とする。

1. 北琉球方言

与論島麦屋東区方言(菊・高橋 2005)の単純名詞の大部分は次の三つの音調型に分類できる。

- 中平型
- 語末拍高型
- 前語末拍含有音節高型

音節内の音調の上昇は語末拍高型の語彙にはある(paa 「歯」、 $pasan$ 「鉄」...)が、語中では音節全体が高く、音節内の上昇はない。音節内の上昇で終る名詞に助詞が接続すると、本来上昇音調を担っていた音節が低音調になり、助詞が高く続くのである($paa-nu$ 「歯が」、 $pasan-tu$ 「鉄と...」; $pana-nu$ 「花が」、 $abura-tu$ 「油と」...) (上野 1999b : 5, 10)。

与論方言の副詞にもこの三つの音調型がある。

- | | | |
|-----------------|-------------------|----------------|
| (1) 中平型 | 語末拍高型 | 前語末拍含有音節高型 |
| sjeē 「ふと、すぐ」 | icjāā 「どんなに、いかに」 | duku 「あまり、特に」 |
| ganci 「早く」 | mittān 「ひどく、ずいぶん」 | gagān 「そんなに」 |
| kutukutu 「ふつつつ」 | kacciri 「きっかり、丁度」 | jussara 「たらっと」 |

が、この他に、副詞に次のような音調型もみられる。

- | | |
|------------------------|---------------------|
| (2) kanaraazi 「必ず、きっと」 | tiici 「ちっとも」 |
| kibariiti 「頑張って、どうか」 | sadamiiti 「定めて、限って」 |
| munjaaku 「のんびりと」 | juttaasja 「よく、完全に」 |

副詞の中には語中の音節内上昇音調が存在し、これは感動詞と副詞特有の音調である¹。これらの副詞は、単一形態素なら、前語末拍が高く、複数の形態素からできた副詞は、語末形態素に先行する拍が高い(3)。

- | | |
|----------------------------------|------------------------|
| (3) a. huigui-tu 「濃いめに」 | siisii-tu 「すっきり」 |
| nukunukuu-tu 「暖かく」 | takadakaā-tu 「高々と」 |
| nagurinagurii-tu 「みすばらしく、あわれそうに」 | |
| b. cjoodu 「ちょうど」 | cjōndu 「わずか」 |
| teebun 「大分、相当」 | zjoobun 「確かに」 |
| massigu 「まっすぐ」 | mattooba 「正しく、正直に」 |
| c. uduu'uduu 「うとうと、うつらうつら」 | |
| googiigoogii 「ぎこぎこ」 | kibaakibaa 「きっぱり、はっきり」 |
| kirinkirin 「くるくる」 | ooraaooraa 「ゆらゆら」 |
| pikkakaipikkakai 「ひっきりひっきり」 | |

(2)、(3) の副詞は特徴的な音調型を持っているのみならず、高音調を担う軽音節は長母音化する²。この長母音化はあたかも音節内上昇ができるために適用しているようである。長母音も音節内上昇も、副詞に一種の強調をもたせる働きをしていると考えられる。

沖縄本島北部の今帰仁村与那嶺方言は、単語の高く始まるところと音調が下がるところの両方が弁別的である。本稿では上がり目の位置に注目する。

アクセントや形態素の境界の位置の関係で、調値の上がり目が一拍前にずれることは

あるが、与那嶺方言の単語は、音調の上がり目の位置によって次の二つの型に分類できる。

(4)	I	II
	nagaahasiibi 「長時間遊ぶこと」	nagaahicjuubi 「長い帯」
	phataarakaasun 「働かせる」	?uduurukaasun 「驚かす」
	sipiirakaasun 「押しつぶす」	nanburukaasun 「滑っこくする」
	sinkasun 「沈める」	nanbeerakaasun 「なめらかにする」

I の型は、二拍目を含む音節から高い型で、II の型は、語頭の弱強型 (iambic) の韻脚 (foot) が低く、そこから数えて二拍目を含む音節から高い型である。弱強型の韻脚には次の三つの形がある (Hayes 1995 : 65, 71)。

- 二つの軽音節 (計 2音節2拍)
- 一つの重音節 (計 1音節2拍)
- 一つの軽音節とそれに続く一つの重音節 (計 2音節3拍)

音調の上がり目が左 (語頭寄り) にずれることがあっても、右 (語末寄り) にずれることはないから、第二韻脚より右に音調の上がり目が現れないはずである。しかし、仲宗根 (1983 : 651-61) の「アクセントの型と語例」の表が示すように、○○○○●、○○○○○●と○○○○○○○●の語形 (○=低い拍、●=高い拍) の例は実在するのである (5)。

- (5) sanagaa ci 「こっそり、ひそかに」
 ?ibataami ~ ?ibateemi 「狭苦しく」
 ?incjataami ~ ?incjateemi 「短く」
 japaataami ~ japaateemi 「やわらかく」
 theemaasi ~ theemakaa si 「力いっぱい」(名詞 thee 「力」)
 marikeeti ~ marukeeti 「まれに」(名詞 marii 「稀」)
 sikiduusi 「絶えず、ひっきりなしに」
 ?umizjaa-tu ~ ?unjaa-tu 「うんと」
 pheebee-tu 「早々と」 saazjaa-tu 「きれいさっぱり」
 nagaanagaa-tu 「長々と」 takaadakaa-tu 「高々と」
 sabisabii-tu 「さびしく」 harugaruu-tu 「軽く軽く」

この語頭寄りの二韻脚に高音調がない音調型は与那嶺方言の音調体系の中において特

異であって、副詞にしか現れないものである。

副詞は、「今帰仁方言のなかでも、諸志、兼次方言に特徴的なアクセント」があるという報告がある（島袋 1975 : 19）。その「特徴的なアクセント」とは音節内上昇音調である(6)。

(6) 諸志方言（島袋 1975 : 19）

jagaati 「やがて」

sanagaaci 「こっそり」

hatagataatu 「濃く」

harugaruutu 「軽々と」

兼次方言（仲宗根 1987[1975] : 表2）

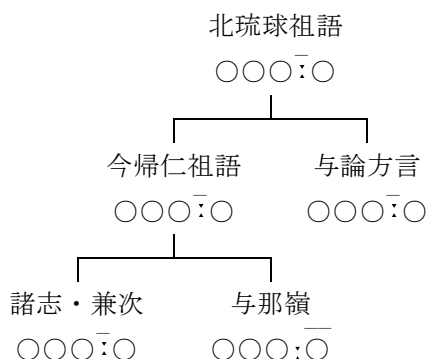
sabisabiitu 「寂しく」

sanagaaci 「こっそり」

hatagataatu 「濃く」

harugaruutu 「軽く」

今帰仁村内の方言では、諸志・兼次方言の *sanagaaci*、*hatagataatu* が今帰仁祖語形をそのまま反映して、これが、語中の音節内上昇を回避するために、与那嶺方言の *sanagaaci*、*hatagataatu* に変化したと考えられる。逆方向の変化 (*sanagaaci* > *sanagaaci*) は有標な音調パターン（語中の音節内上昇）を創り出すことになる。副詞に強調意識を持たせるために生じたと考えられなくはないが、この音調型が与論方言の副詞の音調型(2)、(3)と同じであるから、同じ有標のパターンが独自に与論と今帰仁村諸志・兼次の二ヶ所で生じたとは考えがたい。やはり、与論方言と諸志・兼次の副詞に同じ有標な音調型があることから、この型が最近共通祖語に遡るであろうと想定できる^{3,4}。この最近共通祖語とは北琉球祖語である（ローレンス（近刊））。



与那嶺方言において語中の音節内上昇音調はいくつかの重言(7a)や並列語(7b)⁵に認められるが、これは一語への統合が不完全なために生じた例外的な構造である(Lawrence 1990 : 147-50)。

- (7) a. tuga[̄]i[̄]pigai 「とがっていること」
 picja[̄]i[̄]picjai 「びかびか」
 b. juruujunaaha 「よる夜中」
 cinuucipaara 「衣類」
 t^hoojamaatu 「中国と日本本土」

与那嶺方言では -tu 「と」 を伴わない反復形（疊語）の副詞は（8）の音調になる。

- (8) naga[̄]anagaa 「長々と」 mucja[̄]amucjaa 「べたべた、ねばねば」
 sapa[̄]asapaa 「もろく」 joro[̄]o[̄]joro 「ずるずる、だらんと」
 juru[̄]juru 「ゆるゆる」 muzju[̄]muzju 「うじゃうじゃ、むずむず」
 ʔoojaaʔoojaa 「はたはた」 hatanci[̄]hatanci 「傾き傾き」

これは、語頭韻脚が低く、その次の韻脚から高くなって、単語の後部成素の第一拍にアクセントがあるという、II の型（4）の動詞で始まる複合動詞にもあるパターンである。この音調型は与論方言の（3c）の音調には直接つながらないであろう。

2. 南琉球方言

八重山方言の一つである鳩間方言は、基本的にはいわゆる二型アクセントの言語である（加治工 1992 : 317 ; ローレンス 1997）。名詞は、音調によって、平板型と起伏型とに大きく分かれ、平板型は語頭の軽音節を除いて単語全体が高平で、起伏型は語頭の軽音節と語末音節以外が高平である。単純名詞の約97%がこの二型に収まるのである。残りの約3%は低平型（1.7%）か、語末の二音節が低い起伏型（1.3%）で発音される（ローレンス 1997 : 2-4）。

副詞にも名詞と同じ音調型がみられる（9）。

- | | | |
|----------------------------------|----------------------------------|--|
| (9) 高平型 | 起伏型 | 低平型 |
| kisa [̄] 「先刻、すでに」 | ᵀduku [̄] 「あまり」 | ᵀaibu [̄] 「あんな」 |
| sidaki [̄] 「先に」 | deezi [̄] 「大変」 | ᵀsin [̄] ni [̄] n 「わざわざ」 |
| battaibattai [̄] 「バタバタ」 | tooritoori [̄] 「たぐりたぐり」 | ᵀgoosigoosi [̄] 「ごしごしと」 |

副詞に、語頭の（弱強型）韻脚が低くてそのあとが高く続く音調型（10）もあり、これは感嘆詞と呼びかけの呼称にもみられる音調型である（ローレンス 1997 : 12, 24）。

- (10) $\overline{\text{ataacima}}$ (～ $\overline{\text{ataacima}}$) 「ちょっと」
 $\overline{\text{bohu ti}}$ 「ボツンと」 $\overline{\text{kisaa ti}}$ 「すでに」
 $\overline{\text{biccuti}}$ 「そっくり」 $\overline{\text{dakkati}}$ 「びっしょり」
 $\overline{\text{misukuu}}$ 「用心して」 $\overline{\text{manamaaciN}}$ 「すぐ」 ($\overline{\text{manama}}$ 「今」)
 $\overline{\text{auuau-si}}$ 「青々と」 $\overline{\text{kumaakuma-si}}$ 「細かに」
 $\overline{\text{siraasira-si}}$ 「ぼんやりと」 $\overline{\text{turii turi-si}}$ 「静かに」
 $\overline{\text{misukoomisukoo-si}}$ 「用心して、丁寧に」

形容詞 $\overline{\text{kimu'icaaN}}$ 「可哀相」(＜肝＋痛さ)は四音節語で典型的な起伏型音調であるが、その副詞形である $\overline{\text{kimu'icaa}}$ 「可哀相に」は(9)、(10)の音調型とまた別のものになっている。語末音節のみが高く発音される音調型(11)で、副詞独特の音調型のようなものである。

- (11) $\overline{\text{kannaazi}}$ 「必ず」
 $\overline{\text{kasaakasa}}$ 「みすみす」 $\overline{\text{kasiikasi}}$ 「きちんと」 $\overline{\text{takaataka}}$ 「高々と」
 $\overline{\text{agaa'aga-si}}$ 「真っ赤に」 $\overline{\text{aciiacii-si}}$ 「熱々と」 $\overline{\text{takaataka(a)-si}}$ 「高く」
 $\overline{\text{hukaahukaa-si}}$ 「深く」

鳩間方言の副詞のこの語末音節卓立型音調は北琉球祖語に再建されるような前語末拍卓立型音調から、今帰仁村与那嶺方言の語末音節卓立型音調ができたと同様に成立したのであろう。鳩間方言の $\overline{\text{kisa}}$ 「すでに」(平板型音調)と $\overline{\text{kisaa ti}}$ 「すでに」(10)とを比較すると、後者の長母音は* $\overline{\text{kisaate}}$ という、前語末拍卓立を伴った長音化の跡をとどめている可能性がある。

同じ八重山方言である石垣方言(宮城2003)では、副詞は名詞・動詞などの語彙と同じ音調型で発音される。石垣方言は、音調の下がり目の有無が弁別的で、平板型と起伏型の二型の音調型がある。音調の上がり目は弁別的ではなく、語頭から高いという発音と、語頭の軽音節が低く、次音節から高くなる発音とは自由変異にある。語頭の重音節内に音調が上がる単語は少数存在するが、副詞(12)と感動詞のみである⁶。

- (12) $\overline{\text{kaikai}}$ 「まったく」 $\overline{\text{kaikai-si}}$ 「きれいに」
 $\overline{\text{maimai}}$ 「大きめ」 $\overline{\text{maidan}}$ 「十分に、まことに」

この音節内上昇音調は安定したもので、与論方言などの副詞の特徴的な音調と無関係

ではあるまい。

西表祖納方言はその他の八重山の諸方言同様、声門閉鎖音（[ʔ]）は音素として存在しないはずである。音声としては、母音始まりの単語の語頭に自動的に付くし、複合語の場合この声門閉鎖音は語中にもあらわれる。これも他の八重山諸方言同様である。しかし、西表祖納方言に [maroʔo_omaro] ~ [maruʔu_umaru] 「丸く」⁷ という、予測しないところに声門閉鎖音が現れる単語が一つだけある。これは音韻的に /maroʔmaro/ ~ /maruʔmaru/ で、[ʔ] の直後の無声母音は声門閉鎖音の外破である可能性がある。この単語の声門閉鎖音は、*maru_umaru か *maro_omaru の有標な音節内上昇音調の代わりに、有標な音素で強調の効果を上げたと解釈できる。高音調の位置は前部成素の最終音節で、祖形の位置を受け継いでいる。

宮古諸方言の形容詞にいわゆる「重複形」があって、その前部成素の末尾拍が長音化する。程度を特に強調するとき、重複形の前部成素の高母音が中段母音に低母音化する（13b）。(13) に挙げる例は平良旧市街方言のものである（狩俣2005）。

- | | |
|------------------------|----------------------|
| (13) a. takaataka 「高い」 | sukaraasukara 「塩辛い」 |
| avvaa'avva 「脂っこい」 | ikjaraa'ikjara 「少ない」 |
| upuu'upu 「大きい」 | ffuu'ffu 「黒い」 |
| pisiipisi 「寒い」 | dooziidoozi 「上手」 |
| ivv'iv 「重い」 | jamm'jam 「痛い」 |
| b. upoo'upu 「大きい」 | ffoo'ffu 「黒い」 |
| pisjeepisi 「寒い」 | imee'imi 「小さい」 |

伊良部島仲地方言の形容詞の重複形の場合、前部成素の末尾拍の長音の中に声門閉鎖音が割り込むのである。

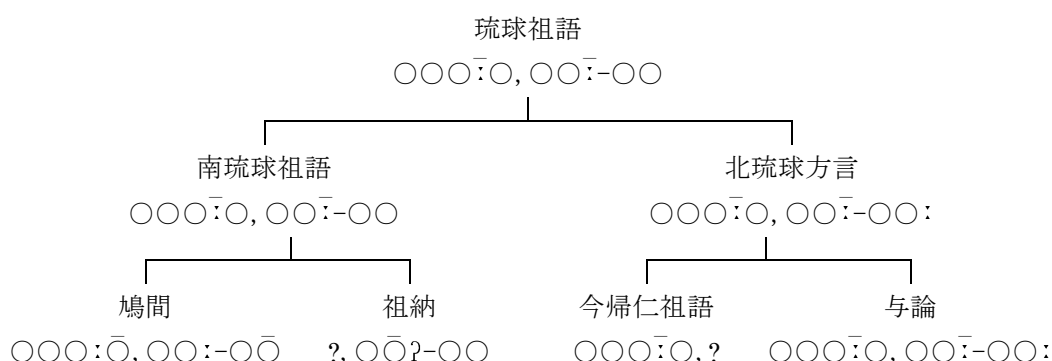
- | | |
|---------------------|--------------|
| (14) ffoʔo'ffu 「黒い」 | vvʔv'vv 「重い」 |
| jamʔm'jam 「痛い」 | |

仲地方言の重複形における前部成素の高母音の中段母音への低母音化といい、声門閉鎖音の使用といい、西表祖納方言の [maroʔo_omaro] と共通点が多い。石垣方言に ΦuΦoo ΦuΦu 「黒い」、sīsoosīsu 「白い」 の例もあるから、この低母音化過程は南琉球祖語に再建できるといえよう⁸。

多良間方言 *massiigu* 「まっすぐ」(平山1983:923) は非反復形で、前語末音節・拍が長音化している例で、鳩間方言の *kisaa ti* 「すでに」や与論方言の *kanaraazi* 「必ず、きっと」を考え合わせると、北琉球祖語にあったと考えられる、長母音化を伴う前語末拍長母音化は琉球祖語まで遡るといえよう。

3. 結語

以上の考察をまとめると、副詞の特殊音調は次の系統樹のように琉球祖語に再建できると思われる。(〇〇-〇〇は「-と」を伴わない反復形(例 **taka-taka*)で、〇〇〇〇は単一形態素から成る副詞(例 **kanarazu*)および一拍形態素で終わる副詞(例 **takataka-to*)を表す。)



参考文献

- 伊是名島方言辞典編集委員会(編) 2004. 『伊是名島方言辞典』伊是名村教育委員会.
 上野善道 1999a. 「与論島東区の用言のアクセントー 付体言のアクセント資料ー」
 『東京大学言語学論集』18:3-159.
 上野善道 1999b. 「与論島東区の多型アクセント体系」『國語學』199:188-174
 (1-15).
 加治工真市 1992. 「鳩間(八重山)方言」『現代日本語方言大辞典1』314-20. 明治
 書院.
 狩俣繁久 2005. 「沖縄県宮古島平良方言のフォネーム」『日本東洋文化論集』
 11:67-113 (琉球大学法文学部紀要).
 菊 千代・高橋俊三 2005. 『与論方言辞典』武蔵野書院.
 木部暢子 2000. 『南西部九州二型アクセントの研究』勉誠出版.
 島袋輝子 1975. 「今帰仁諸志方言」琉球大学卒業論文.

- 寺師忠夫 1958. 『奄美方言の研究 第IIII編語い』 私家版.
- 仲宗根政善 1983. 『沖縄今帰仁方言辞典』 角川書店.
- 仲宗根政善 1987 [1975]. 「今帰仁方言概説」『琉球方言の研究』 104-48. 新泉社.
- 中本正智 1979. 「徳之島井之川方言の語彙」『琉球の方言 奄美德之島井之川』 7-67.
- 野原三義 1992 [1972-73]. 「琉球方言の反復法 — いわゆる畳語などを中心に —」
野原三義 (著) 『うちなあぐち考』 130-74. 沖縄タイムス社.
- 平山輝男 1983. 『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』 桜楓社.
- 外間美奈子 2004. 「石垣方言の擬音擬態語 (1)」『沖縄芸術の科学』 16:241-57 (沖縄県立芸術大学附属研究所紀要).
- 本田碩孝 1992. 『奄美民話集5 保マツ姫昔話集』 私家版.
- 町 博光 1987. 「南島方言の副詞の造語法 — 畳語形式語の強調心理 —」 琉球方言研究クラブ30周年記念会 (編) 『琉球方言論叢』 543-54.
- 町 博光 1992. 「鹿児島県大島郡与論町朝戸方言における身体感覚を表すオノマトペ」 方言研究ゼミナール (編) 『方言資料叢刊』 2:264-8.
- 宮城信勇 2003. 『石垣方言辞典』 沖縄タイムス社.
- 宮良信詳 1995. 『南琉球八重山石垣方言の文法』 くろしお出版.
- ローレンス・ウエイン 1997. 「鳩間方言のアクセント — 名詞」『沖縄文化』 85:88-63 (1-26).
- ローレンス・ウエイン (近刊). 「沖縄方言群の下位区分について」『沖縄文化』 100.
- Hayes, Bruce. 1995. *Metrical Stress Theory: Principles and case studies*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lawrence, Wayne P. 1990. "Nakijin Phonology: Feet and extrametricality in a Japanese dialect." 未刊博士論文. 筑波大学.

謝辞

インフォーマントになって下さった加治工真市氏 (鳩間方言)、富浜定吉氏 (伊良部島仲地方言)、那根 弘氏 (西表祖納方言) に心からお礼を申し上げる。

西表祖納方言の調査(1998年10月22-24日)は日本交流基金の援助を得て行われた。

注

- ¹ 形容詞[—]taasan「高い」は例外ではない。形容詞は基本的に中平型と、形容詞語尾-s(j)anの直前の語幹末拍を含む音節が高い型の二型がある。

$\overline{\text{masa}}_{\text{N}}$ 「うまい」 $\overline{\text{jaasa}}_{\text{N}}$ 「弱い」 $\overline{\text{piisa}}_{\text{N}}$ 「寒い」 $\overline{\text{siisja}}_{\text{N}}$ 「すっぱい」
 $\overline{\text{nensa}}_{\text{N}}$ 「遅い」 $\overline{\text{jassa}}_{\text{N}}$ 「劣る」 $\overline{\text{upisja}}_{\text{N}}$ 「大きい」 $\overline{\text{takasa}}_{\text{N}}$ 「高い」
 $\overline{\text{kurus}}_{\text{N}}$ 「黒い」 $\overline{\text{hadamiisja}}_{\text{N}} \sim \overline{\text{hada}}_{\text{NS}}_{\text{N}}$ 「怒りっぽい」
 $\overline{\text{kooturus}}_{\text{N}}$ 「恐ろしい」 $\overline{\text{ikinasja}}_{\text{N}}$ 「忙しい」 $\overline{\text{pitaroosja}}_{\text{N}}$ 「汚い」

$\overline{\text{takasa}}_{\text{N}}$ 「高い」と同じ意味で $\overline{\text{taasa}}_{\text{N}}$ もあるが、この音調からこの語形の語幹は音韻的な長音ではなく、二音節であることが判る。本稿の書き方では ta'asa_{N} と書くべきところである。

鹿児島市方言の saa 「様」も、音調から、長音ではなく、二音節であるという（木部2000：18）。また、与論方言の歴史的な r -語幹動詞の連体形にある Vi (V =母音) も二音節扱いである（上野 1999a：14, 20, 41）。

- ² 前部成素の末尾軽音節が長音化しない副詞もある (i) が、これは今帰仁方言の (7) の例と構造的に同じ可能性がある。

(i) $\overline{\text{acikunuruku}}$ 「暑くしたりぬるくしたりするさま」
 $\overline{\text{adari}}_{\text{N}} \overline{\text{koodari}}$ 「不和、不仲」(← $\overline{\text{adarju}}_{\text{N}}$ 「不和になる」)
 $\overline{\text{hasabi}}_{\text{N}} \overline{\text{hasabi}}$ 「(衣服の) 重ね重ね」(← $\overline{\text{hasabju}}_{\text{N}}$ 「(衣服を) 重ねる」)
 $\overline{\text{keesi}}_{\text{N}} \overline{\text{sigeesi}}$ 「返す返す」(← $\overline{\text{keesju}}_{\text{N}}$ 「返す」)
 $\overline{\text{miisamiisa}}$ 「新しく新しく」(← $\overline{\text{miisa}}_{\text{N}}$ 「新しい」)
 $\overline{\text{piccjarapiccjara}}$ 「ぴかぴか」(← $\overline{\text{piccjjajun}}$ 「光る」)
 $\overline{\text{pjoorupjooru}}$ 「機で軽やかに杼が走る音」

- ³ 伊是名島諸見方言（伊是名島方言辞典編集委員会編 2004）の $-\text{tu}$ を伴った畳語は与那嶺方言と同様に語末拍のみが高い音調型 ($\text{○○○○}:\overline{\text{tu}}$) になっている。しかし、 $-\text{tu}$ を伴わない畳語に古いと思われる音調型が生き残っている。

$\overline{\text{ciwaaciwaa}}$ 「手際よく」 $\overline{\text{kasaakasaa}}$ 「さっさと、てきぱき」
 $\overline{\text{kawaagawaa}}$ 「きっぱり、さばさば」 $\overline{\text{kutaakutaa}}$ 「ぐつぐつ」
 $\overline{\text{muzaamuzaa}}$ 「うようよ」 $\overline{\text{simiizimii}}$ 「じわじわ」
 $\overline{\text{suriizurii}}$ 「ゆっくりゆっくり」

他の音調型の副詞の多くには長母音化がみられない ($\overline{\text{dusadusa}}$ 「どさどさ、どっしどっし」、 $\overline{\text{kutukutu}}$ 「ぐつぐつ」、 $\overline{\text{dakudaku}}$ 「どきどき」...) という事実は、長母音化と音節内上昇との密接な関係を裏付けるものである。

- ⁴ 奄美系方言では、旧名瀬市方言に $\overline{\text{tukidukii-tu}}$ 「ぐっすりと」がある（寺師 1958：57）が、 $-\text{tu}$ を伴わない畳語は長母音化しないようである（同書 $\overline{\text{guruguru}}$ 「さっさと」、 $\overline{\text{guzjaguzja}}$ 「細かく」、 $\overline{\text{situsitu}}$ 「しとしと」）。徳之島井之川方言も $-\text{tu}$ を伴わない畳語はあまり長母音化しないようである ($\overline{\text{cira}}_{\text{N}} \overline{\text{cira}}$ 「ぴくぴく」、 $\overline{\text{gutugutu}}$ 「がたがた」、 $\overline{\text{sorosoro}}$ 「ぞろぞろ」...（中本 1979：46）が、本田（1992）に $\overline{\text{iroo'iro}}$ 「いろ

いろ」(74, 165, 179頁)、bara(a)bara「ばらばらと(降る)」(8頁)の長母音化の例はみえる。又、同書にkanaraazu「必ず」(206, 212, 213頁)があり、これも与論や今帰仁の副詞にみられる長母音化過程を受けている副詞である。

- ⁵ 並列語の多くは別の音調になる。普通の複合名詞の音調のほかに、語頭韻脚の次の拍にアクセントが付与される音調型もある(i)。

(i) ʔujaacḥjoodē 「親兄弟」

thịinuciphisanuci 「手で指したり足で指したり」

nintaịhukitai 「寝たり起きたり」

- ⁶ 他の例の mainịci 「毎日」、mainịN 「毎年」、maitusị 「毎年」は宮城(2003)では名詞と分類されているが、副詞用法もあって、重音節内の上昇から副詞として音調が付与されていると解釈できる。
- ⁷ 那根 弘氏(1911年生まれ)は普通[maru:maru]を使うが、「昔の七・八十歳のおばあさんたち」は[maroʔọmaro]～[maruʔụmaru]と発音していたという(1998年10月談)。
- ⁸ 石垣方言に後部成素の末尾母音までも長音化するΦuΦooΦuΦoo「黒い」、sīsoosīsoo「白い」もある(宮良 1995:147; 宮城 2003)が、これは比較的新しい形であろう。